

子どものまちづくり実践

～商店街（安慶名市場）の活性化を考える～

嘉納英明

ABSTRACT（要旨）

本報告は、子どもによるまちづくりへの参画の可能性を探ることを目的とした実践記録である。聞き取り調査等から、子どもの住む“地域”“まち”の切実な問題のひとつとして、校区内にある商店街（安慶名市場）の空洞化問題が浮き彫りとなった。以後、子どもの活動は、①商店街の活性化を願い、市場近郊でボランティア活動を展開したこと、②将来の安慶名地区の創造図（夢と希望のまちあげな）を制作し市長部局へ提案したこと、③子ども主催の「あげな子ども市場」を開催することで、学校と地域の連携による地域活性化の一方策を提案したことである。子どもが“まち”の問題を発見し、子どもの視点から地域の活性化を試みた点が、本実践の特徴である。

1、子どもにとってのまちづくりとは何か — 意義を探る —

“まちおこし”、“むらおこし”は、もはや地域振興において単なる合言葉やスローガンの意味合いで使われているのではなく、個々の実際的な場面で使われている用語である。近年、沖縄県内でもまちづくりの運動やそれをめぐる議論が活発である。例えば、紅イモを“むらおこし”の起爆剤に活用した読谷村の事例は広く知られており、また普天間基地を抱える宜野湾市は、基地移転後の跡地利用をまちづくりの観点から議論を積み重ねてきているし⁽¹⁾、豊見城村商工会では、街道を花プランターで彩ることにより賛同者を増やし、まち全体を明るく「憩いと癒し」の環境を創出することを目指している⁽²⁾。具志川市においては、EM（有用微生物群）によるまちづくりが知られているが、これは、「豊かで住

みよい癒しのまち具志川の実現のためにはEMを活用することが有効」とする現市長の言動にも表れている。99年4月に市庁内にEMによるまちづくり推進プロジェクトチームを発足させていることから、EM活用によるまちづくりについて本腰を入れ始めていることがわかる⁽³⁾。他方、平成14年度完成を目指している「具志川市青少年育成国際総合交流センター（仮称）」の名称募集が始まっているが、これは、住んでみたいまちの実現に向けた具志川市の取り組みの事業の一環に位置づいているものである。いずれの事業も、まちづくりの観点から始動したものであり、今後の推移が注目される。

ところで、現代におけるよい“まち”、よい“むら”の内実とは、一体何か。田村明は、よい“まち”とは、「住んでいるすべての人々にとって、生活が安全に守られ、日常生活に支障なく、気持ちよく豊かに暮らせ、緊急時にも対応できる『まち』」がそれであり、「住んでいてよかったという実感を心から感じ、次の時代にも継続が期待できるもの」と簡潔に説明している⁽⁴⁾。続けて田村は、よい“まち”をつくるのは、協働して責任をもってつくってゆくという意識に目覚めた住民＝市民こそが、まちづくりの実践の主体であるとする⁽⁵⁾。田村の指摘する目覚めた住民がまちづくりの主体ならば、子どもを含めた地域住民の全てが、まちづくりを担う市民のひとつりとして成長し育ち合う可能性は否定できない。それを示唆する一例として、岡山県は、「子どもとまちづくり推進計画」を策定し、子どもたちのまちづくりに関する興味や創造力を育むことは、まちづくりの推進にとって有意義な活動であると考え、精力的に各種事業を推進している。例えば、まちづくりに関する子どもの作品や提案のコンクール、まち歩きによるまちの良さや課題の発見等を行うウォー

ク・ラリー、植樹や芝はり等の子どもの共同作業である。これらの活動をとおして、①子どもと地域社会とのつながりを深め、②子どもの教育環境の形成を図り、③子どものまちづくりについての「気づき」や「責任ある参加」を促し、まちづくりのリーダーの人材を生み育てるものになる、としてまちづくり事業の意義を強調する⁽⁷⁾。

生活している環境をより豊かに安全に暮らせるまちに創り変えていく視点は、昨今の環境学習の動向とも軌を一にするものであり、今後益々まちづくり学習の教育的な意義が重視されてくるであろう。子どもの生活環境が学習の素材としてあるので、自己の生活と切り結び学習を展開していくに違いない。しかも、子どもの視点で地域の諸問題に直面し考え、問題解決を試みることをとおして、将来のまちづくりの人材育成ともなろう。子どもと共にまちづくりを考えるのであれば、どのような参加形態が考えられ、実践活動が営めるのであろうか。筆者は、まちづくりは、何も大人のみが考えるものではなく、何らかの形で‘市民である子ども’もまちづくりを考え、参画していくプロセスが重要であると考えている。

2. 子どもの生活実感から地域の“よさ”と“問題”を探る

(1) 子どもの生活する‘まち’の概観

筆者の勤務するあげな小学校は、沖縄本島中部に位置する具志川市のほぼ中央に位置している。県道8号線と75号線が交差する安慶名十字路は、石川市、勝連町、与那城町、沖縄市への交通の要所となっており、朝夕は、交通渋滞もみられる。安慶名区は、戦後早くから商店街・住宅街として発展してきたが、安慶名区と隣接するみどり町の区画整理が進み、住宅街や商店街が新しく形成されてきたため、安慶名区の人口は激減してきた。学校の在籍数もここ数年減少傾向にある。それゆえ、安慶名区の活性化を図るため、具志川市は、道路の拡張とアーケード街を構想した再開発事業を進めている。現在、市議会においては、安慶名地区再開発事業をめぐる議論が展開し、まちの活性化の方向性について議論が積み重



ねられている⁽⁸⁾。もうひとつの校区である西原区は、安慶名区とは対照的な行政区である。西原区は、戦後、城内の大半を米軍用地として接収され（キャンプマトリクス）、接収を免れた地域では、主としてさとうきび生産や畜産を営んでいる農業地域である。

(2) まちの‘よさ’、‘問題’とは何か

子どもは、住んでいる地域のもつ“よさ”と“問題”を感じながら生活している。前者を強く意識している子どもは、‘すみやすいまち’として肯定的に地域をとらえ、そのよさを例示する。学級の子ども28名中、具志川市をすみやすいまちとして評価しているのは7名である。その理由は、①自然に恵まれている、②商店街がある、③住みなれているから、④遊ぶ所がたくさんあるから、⑤事故や事件が少ないから、⑥具志川まつりがあって大勢の人がくるから、⑦基地が少ないと思うから、⑧都会ではないので空気がきれいだから、以上の点を挙げる。これらは、まちの利便性、快適性、安全性等が、日常生活の中で子どもに実感されていることを意味している。現在のまちの暮らしに肯定的な子どもは、‘ヤンバルと比べて、店がたくさんある’‘土地の値段があまり高くない’‘海と山が近い’‘いろんな所に公園がある’‘市立図書館が近いから’‘ダイオキシンとかO157が発生しないから’^オと述べ、まちの利便性と快適性を挙げ、また深刻な環境問題の発生がないことを理由に具志川市をすみやすいまちとしている。

他方、すみやすいまちかどうかの問いに対して、「わからない」と回答した子どもは、21名である。その理由は、地域の“よさ”と“問題”を指摘しながらも、両天秤で測ることの困難を発露している。下記は、「わからない」と回答した子どもの声である。

< まちの“よさ” >

- ①ボランティアなどがあるから。
- ②あまりリストラがない。
- ③偏見があまりない。
- ④相談施設がある。
- ⑤花や草が植えられてきれいな町だから。
- ⑥ポイ捨てをする人が少ないから。
- ⑦ゴミがあまりない。
- ⑧学校がすぐ近くにある。
- ⑨お店やスーパーが近くにある。
- ⑩広い道がある。

< まちの“問題” >

- ①基地がある。
- ②暴走族がいるので夜、眠れない。
- ③アメリカ人がよく事故を起こす。
- ④ゴミを分けて出さない人もいるから。
- ⑤交通事故が多い。
- ⑥大通りでは、車の量が多い。
- ⑦ゴミが多い所がある。
- ⑧不良がタバコを吸ったりしているから。
- ⑨お菓子の袋をポイポイ捨てる人がいる。
- ⑩最近、建物が増えているから。
- ⑪自動車が増えて、空気が汚れている。
- ⑫自然がどんどんなくなっている。
- ⑬ノラ犬が増えているから。
- ⑭夏の夜は、虫が多くて眠れない。
- ⑮道のせまい所がある。
- ⑯人口は多いけど、土地は小さい。

以上のまちの“よさ”と“問題”は、子どもが住んでいるまちをどのように認識しているのかを知る上で大切である。これらは子どもがとらえたまちの姿であるが、実際にまちを歩き、地域住民への聞き取りをとおして、実態に近いまちの姿を直視するこ

とが必要である。

3、まちの探検（フィールドワーク）とアンケート調査

まちの“よさ”と“問題”という視点からまちを探検すると、子どもの予想を越えた、意外なことが発見できた。まちの探検は、安慶名区と西原区の二つの班に分かれた。2時間余のまちの探検後、学級で報告会を行なった。西原区では、ボランティア活動に従事する人がいたり、自然が多く残されていることを報告する一方、区内に散乱するゴミ問題があることが報告された。安慶名区では、近年のみどり町の開発に伴い、安慶名市場の衰退が報告された。市場を探検した子どもたちは、「客が少ない」「ほとんどシャッターが下りたまま」「おじいさんやおばあさんしか、店にはいなかった（店主として）」と口々に述べる。市場の近郊に住む康司は、市場内の商店主から「駐車場がないからお客が来ないんだよね」の言葉に、市場の置かれている現状に強い関心を示してくる。

まち探検の報告会后、両区民を対象としたアンケート調査を実施することになった。質問項目は、次の三点である。①住んでいてよいところ、いいことは何ですか、②住んでみての悩みはあるか、③こうなってほしいという願いがあるか。安慶名班と西原班に分かれ、前者は、主として安慶名市場の調査活動、西原班は、区内全般とし、いずれも個別訪問しての回収方法となった。調査活動は、2日間に及び、回収した個票は、安慶名区44世帯、安慶名市場区25世帯、西原区151世帯、計220世帯である。集計は、区内を探検したグループ毎に集計したのち、3つの区毎にまとめた。

アンケート調査の結果、安慶名区は、交通や買い物にも便利であり大型店舗も進出しているため活気がある地域としてとらえられている反面、駐車場不足や道路の狭さ、自動車の騒音、街灯の少なさ、ゴミ問題等が、住民の悩みであることがわかった。他方、西原区の住民は、豊かな自然が残され、住民同士のコミュニケーションが形成されていること、土地の広さ、交通量の少なさを、住みやすいことの理

由に挙げる。西原区民の悩みは、スーパーや商店街がないため買い物には不便な地域であること、畜舎の臭いがきついこと、歩道が狭くて危険であることである。当然、西原区民は、以上の悩みの解消を望んでいる。

安慶名市場区の回答は、市場内で商売を営み、あるいはそこに住む住民からの聞き取りである。市場の住民は、「いろんな人に出会えるし、昔からの友達もたくさんいるから」として市場の住み心地を強調する。またバス停が近いこと、交通が便利であること、買い物にも便利であること、と回答している。住民の悩みは、駐車場がないため客が来ないことであり、そのため品物が売れない、商売をするには厳しいことを子どもの回答に寄せている。

アンケートの集計後、子どもたちの市場に対する関心の高まりを感じ、その後、安慶名市場に焦点をあてた学習活動に進むことになる。「なぜ、安慶名市場は、暗くて客のいない市場なんだろう?」という素朴な疑問に答えるため、「昔の安慶名市場」を知っている方をゲストティーチャーとして登場して頂いた。

4、安慶名市場の昔と今

(1) 玉里幸子さんが語る「30年前の安慶名と市場」

1949年、熊本県で出生した玉里幸子さんは、生後間もなく帰沖した。現在の具志川市宇安慶名で幼少期から生活してきた玉里さんにとっては、安慶名は、故郷であると同時に近年のまちの変貌振りを肌で感じてきた市民の一人である。玉里さんは、本校のPTA事務員である。その玉里さんに「30年前の安慶名と市場」のタイトルで「昔」の安慶名を語ってもらった。以下、当日の録音テープを書きおこし、一部抜粋した。

- 期 日 2000年2月1日(火)第4校時
- 場 所 本校5年1組の教室
- 話 者 玉里幸子(本校PTA事務員)
- 聞き手 5年1組の児童及び担任

私が、安慶名に住んでほしい50年ぐらいかね。

安慶名は、昔は、もっと賑やかでした。西原は、家がポツポツあって、農業をしている方が多かったですね。どちらかという、西原の子どもは、おとなしかったですね。安慶名の子は、都会っ子で、また、安慶名の方は、ずっと電気がついていて感じでしたね。学校の正門から西原に行く道は、電気がないから夕方からは、ずいぶん暗くて怖かったよ。安慶名に行くとうって変わって、すごく賑やかでしたね。あの頃は、家に自家用車が1台あるかないかぐらいで、みんな、よくバスを利用していましたね。自転車とかバイクもよく使っていました。バスで通勤したり、通学していました。

安慶名の市場は、お正月になるととっても賑やかになって、もう大変でした。歩くのもできないぐらいの人でした。ベニヤ通りってあるでしょう。知っているかね。そこは、洋服屋とか、家具屋とかがありました。市場の中に入ると、食べ物屋を中心に洋服屋、魚屋、野菜屋とかがありました。玉さんの友達は、市場に住んでいたもので、雨が降っても濡れないで遊べたね。また、何と言うのかな、今風にいうと、アーケードですよ。トタンを敷いていますけど。あれ、30年前から同じものですよ。玉さんたちは、遊ぶ場所がなかったもんだから、あのトタンの上で遊んだり、トタンの上を歩いて、友達の家に行ったりしましたね。屋根から屋根へ歩いて、隣の家の2階の窓から入ったりしてね。下は、買い物する人で一杯だったからね。

市場の中はね、おばちゃんたちがたくさんいて、そうだね、一人一人、縦横2メートルぐらいのコーナーみたいなものがあって、野菜とか、肉とか、魚とか置いてあるわけ。いらっしやい、いらっしやいと言わなくても、座っていても、簡単に売れたよ。このおばちゃんたちは、売るものをもってきて、売ったら帰る。天願とかからもきたね。(那覇の)公設市場知ってる?行ったことある?(子どもたち、反応なし。1度も行ったことがないようだ。)あれ、見ないといけないね。あんな感じ。売っているおばさんたちには、自分の場所があるんですよ。こういう机みたいのがあって、ここに広げて売るわけ。「はい、かまぼこありますよー」「野菜、ありますよー」

「はい、そこのねえねえ、何探しているの」ってね。「おばさん、蒲鉾あるねえ」って聞いたら、「はい、あちこーこーの蒲鉾あるよー、どうぞー」ってね。こんなおばさんたちから、直接買って、本当に楽しく買えたね。50円しかもっていないけど、60円のものを買いたい。「10円、安めてー」「うん、いいよー」って、こんな感じで買い物したよ。今、スーパーで、50円しかもっていないからって、「10円、安めて」って、買えませんよね。あの時は、本当に買い物するのが、とっても楽しかった。

市場のおばさんには、若いのはいなかったね。40代ぐらいより上ぐらいかな。今の玉さんぐらいかもしれない。買い物する人は、子どももいたよ。「肉一斤、ちょうだい」って。今、肉、買える人いる？肉、買ったことのある人、いる？今は豚肉、何枚とかで、買っているよね。だけど、昔はさあ、肉は、一斤二斤とかで買うわけよね。「お肉、一斤、くださーい」って言って買うわけよね。「お母さん、お肉買ったよー」ってね。自分たちでお使いできるわけ。この野菜が少し傷んでいたら、「おばさん、この野菜50円で高いから30円に安めてよ」って言って、「ああ、もういいさ、30円にするさ、持っていきなさい」ってね。こんなことができたけど、みんな、やったことないでしょう？だから、買い物って、とっても楽しかった。

洋服屋もね、いっぱいズラって並んでいるものだから。いろいろ欲しいわけ。今ではポツンポツンとしかないけど、あの時は、たくさんあって、昔は、サンエーとかないから、道でも、洋服を風呂敷にもってから、服を広げて売っていたさあ。道でパッと広げて売るわけ。店もたくさんあって、道でも売っていたんだよ。盆とか正月には、歩けないぐらい。おしくら饅頭みたいだね。今の具志川まつりぐらいの人だったさあ。

買う人たちは、天願とか、西原、勝連からも来たね。与那城、屋慶名からも来たね。平安座とかの離島からも来たね。平安座は、今は陸続きになっているけど、昔は、船で来るもんだから、一杯買いに来るんです。お肉とか洋服とか、買いに。向こうは、野菜はあるからね。今ごろの旧正月の前には、本当

に一杯の人が来たね。昔はね、旧正だから。晴れ着を買う人もいれば、肉を一杯買う人もいたさ。魚とかも、お正月用に買う人で一杯さ。そして、トラックに乗せて、部落に持って帰る人もいたさ。

玉さんの友達は、市場の中にたくさんいてね。お茶屋さんも玉さんの友達だけど。もう、遊ぶヒマがないわけ。お客さんが一杯いて、玉さんも手伝いに行くわけ。あちこちで手伝いしたわけ。アルバイトじゃなくて、お手伝いよ。想像できますか。今の安慶名の市場は、夜になったら、真っ暗で怖くて、通れませんよね。あの時は、夜の10時まで電気がついてたよ。この教室の蛍光灯じゃなくて、裸電球がついていたさ。こんなものが一杯ついていて、人も一杯いたさ。今は、夜、玉さんでも歩けないよ。怖くて。

いつ頃から安慶名市場が今のようになったかという、15年ぐらい前に、みどり町が区画整理ということで、みどり町を具志川市の中心にしようということで、大きな道を造って、スーパーなんかできて、市場には、人が来なくなったわけ。今、みんな、買い物する時には、車でしよう。みどり町には、駐車場つきの大きなスーパーや店があるけど、市場には、駐車場がないから、客が来なくなってきたわけ。安慶名市場にも大きなスーパーがあったんですよ。エビス屋って。でも、駐車場がなくて、客がだんだん、入らなくなってきたわけ。

玉さんの知り合いには、「もう、昔でたくさん儲けたから、もう安慶名の市場のことはいいよ」という人もいるけど、でも、安慶名のまちを昔のようにどうにかしようと頑張っている人もいるんだよ。半分はいいや、半分はやりたいと思っている人がいるよ。意見がひとつにならないとなかなか話が進まないよね。安慶名もね、活気のあるまちにしよう、家を取り壊して、大きい道を造るという区画整理の話があるんだけど。公園とか、お店をつくらうとする話もあるよ。

昔の安慶名の話に戻るけど、映画館が4つあったわけ。すごいよ。安慶名の大通りに「国映館」というのがあって、「琉映館」と、「東映館」、「第二東映」があったんですよ。今の郵便局あたりが「東映館」、

その近くの今はパチンコ店になっているのが、「琉映館」。安慶名時計店のすぐ側は、駐車場になっていますよね、そこは、「国映館」。そして、ベニヤ通りの角に「第二東映」があったわけ。また、交番の後ろには、今でも大きい建物が残っているよね。安慶名十字路の後ろ側だよ。ここはね、結婚式場だったんだよ。何かがあるたびにそこでやっていたんだよ。玉さんもそこで、結婚したんだよ。映画館は、人が一杯いて、市場もあるでしょう。だから、勝連とか離島からたくさん来て、毎日、千人以上の人が来たんじゃないかな。

30分の「語り」であった。子どもたちは、買い物客でごった返す市場の状況や、映画館や結婚式場であった「昔」の安慶名の話に対して興味深そうに聞いていた。「語り」後の質疑は、実に活発であった（一部抜粋）。

静香 映画館は、いつ潰れたんですか。

玉里幸子 20年前ぐらいにつぶれたかな。最後まで残っていたのが、「第二東映」だったね。ここはね、お芝居もやったわけ。あの頃から、沖縄市が発展してきたので、みんな沖縄市に行くようになったわけ。だから、安慶名はだんだん寂しくなって今の市場みたいになったわけ。

たかひろ 貴寛 昔の市場の道は、狭かったんですか。

玉里幸子 道は同じ。今と全然変わらない。でも、人が一杯いたから、狭く感じたけど、今は、人がいないから広く感じるでしょ。

尚 映画館には、何人ぐらい入れましたか。

玉里幸子 映画館には、100人から200人ぐらい入れたかな。土曜日とか日曜日には、何度も繰り返して、上映して、たくさんの人が入ったさ。

しんや 清哉 安慶名の市場が人気があったときの、みどり町はどうなっていたんですか。

玉里幸子 みどり町は、軍用地だったわけ。大きい塔も立っていたよ。フェンスが張られていて、中は、さとうきび畑でした。畑に

入って、畑に行ったりしていたさ。

まさとし 眞俊

玉里幸子 市場の中の道には、車とか入れたのですか。人が一杯だから、オートバイや自転車で荷物を運んだりしていたよ。車は、大変だからね、あまり入らなかったさ。

奈々

今、安慶名のゲームセンターには、中学生とか不良がいるんですけど、昔も同じだったんですか。

玉里幸子 昔は、ゲームセンターはありませんでした。この場所は、昔、パーマ屋と靴屋がありました。

たくみ 巧

安慶名市場は、何時ぐらいから開いていたのですか。

玉里幸子 朝7時には開いていましたね。肉屋は、もっと早く開いていました。大体、みんな、7時には開いていましたね。

のぞみ 希

安慶名市場で一番人気のあったお店は、どこでしたか。

玉里幸子 やっぱり、お菓子屋さんでしょう。玉さんたち、子どもの時には、お菓子屋さんが人気がありました。やっぱり、人が一杯する所は、食堂とかの食べ物屋さんでしたね。あと、てんぷら屋さん。

(2) 安慶名市場の現状～見学記録から～

玉里幸子さんの「語り」終了後、安慶名市場を見学した。案内役は、玉里さんである。

玉里さんは、市場の小路を南から北にかけて縫うように先導し、しかも個々の建物について懇切丁寧に説明した。「市場通り」と呼ばれた中心街は、いまではすっかりシャッター通りと化している。細々と肉屋や化粧品店を営んでいる店に立ち止まり、「この肉屋さんは、昔から頑張っているよ。この店は、化粧品なら何でも揃っていたから、若い女の客で一杯だったよ」と当時を思い出しながら説明する。続いて、玉里さんは、子どもたちを薄暗い小路の市場の中へ案内する。そこは、かつて裸電球の下、威勢のいい呼び声が飛び交っていた場所である。手を伸ばせば手が届くほどの低いトタン屋根の下で、1人1坪程の売り場が薄暗い中に密集していたとこ

るである。「この狭い中で、たくさんのおばさんが、多くの種類の野菜を並べ、物を売り、生活していたんだよ」の玉里さんの説明に耳を傾ける子どもたち。いまでは錆びつき、蜘蛛の糸が張る水道栓や裸電球のスイッチが、「昔」を語っている。

次に、破損し雨漏りもするトタン屋根のアーケード街の中に入る。ほとんどの店がシャッターを降ろし、客は見当たらない。玉里さんは、「昔」から営業している洋服屋や饅頭店、肉屋の前で立ち止まり、活況のあった市場の状況を記憶を手繰らせながら説明する。市場のアーケード街を出て、県道沿いに出る。安慶名には、4つの映画館があったが、現在は、パチンコ店や駐車場になり、また、結婚式場「安慶名会館」は潰れ、野ざらしにされている。こうした現在の市場の状況と「昔」の違いに、子どもたちは戸惑い、残念そうな表情を浮かべる。

学級の誰もがこれまで市場を歩いた経験があったはずであるが、玉里さんの「昔の市場」の話と見学により、「安慶名市場」に対する新たな思いや願いが、見学直後の子どもの感想に如実に表れた。それは、①30年前の市場への郷愁と再復興への願い、②市場衰退の原因と再開発について、③市場再活性化は、自分たちの課題としている、以上の三つに括ることができる。

〔①の子どもの見学記録〕

☆「私は、玉里さんについていきながら30年前のあげなと市場を探けんしました。昔は、今の市場よりもっとにぎやかだった市場が、いまでは静かになっていました。玉里さんに、30年前には、こんな店がたっていて、こんなだったよというお話を聞きながら、私は『30年前の市場にもどってほしい』という気持ちが大きくなりました。私の家（アパート）は、市場に近いのでよく行ったり、遊んだりしたことがあります。でも、だんだん、静かな市場に変わってしまいました。私が思うには、にぎやかだった市場を思い出しながらではなく、にぎやかな市場になってほしいです。」（葉月）

☆「30年前と今の市場を比べると、とても変わっていました。30年前は、たくさんいた人が、いまでは、4～7人ぐらいしか歩いていませんでした。5ヶ所

ぐらいのお店などは、ほとんど、つぶれていて、とても静かな場所になっていました。30年前みたいに、にぎやかになるのかなあ。あげな会館も、もう、ボロボロになって、駐車場になっていました。もう一度、にぎやかになってほしいです。」（希）

〔②の子どもの見学記録〕

☆「びっくりするほど、変わっていました。明るかったはずの市場が暗くなっていました。私は、昔はすごく明るくてにぎやかだったんだらうなあと思いました。安慶名会館という結婚式場が建っていたとは思いませんでした。私は、昔のにぎやかで明るい市場が見てみたいです。いまは、大きなスーパーやデパートがあって、みんなそこ^{のぞみ}にいて市場を利用しなくなっていると思います。」（彩花）

☆「学校で聞いた話と全く同じでした。みんな店が閉まっていました。玉里さんが言っていた結婚式場と映画館にも行きました。30年前といまでは、相当、変わっていました。駐車場があれば、30年前の市場にもどっているはずです。」（正英）

☆「玉里さんと一緒にあげなと市場を探けんして、昔の市場と全然違いました。お店も閉まっている所がたくさんあって、あいているお店でも、おじさん、おばさんがあまり元気がなかったし、市場もボロボロになっていました。私は、公園などをつくってほしいです。そうしたらお客さんとか、遊びに来る人がたくさん来ると思います。」（静香）

〔③の子どもの見学記録〕

☆「30年前の話の聞いたり、自分で市場の30年前のことを想像して、今の市場を見ると、同じ市場とは思いきれませんでした。30年前の市場は、今の肉屋の店の中で、1人2メートル位のはんい（横）で、食べ物などを売っていたそうです。でも、今の様子からすると、ここが、はんじょうしていたなんて、と疑いたくなるような有様でした。肉屋の人も少し悲しそうでした。30年前のように活気を取り戻してほしいという人もいました。少しはなれた所にあった結婚式場は、もっとすごかったです。あげな会館の「あ」が少しこわれていました。窓？みたいな所もこわれていました。下は、駐車場になっていました。今の市場ははっきり言ってピンチだと思います。な

ぜなら、まわりに、パチンコ店やユニオン、シェーキーズ、ブックボックスなどいろんなお店があるからです。でも、頑張っていけば、30年前のようになると思います。それは、市場の人たちや私たちがまわりの人間しだいと思っています。」(匝矢子)

☆「あげな市場へ行って思ったことは、発展させてほしいなあということです。玉里さんが言っていた、1人2メートルの場所にお店を出して、とても人がいっぱいいたところを、実際に見てみました。そこは、とても暗くて誰1人いませんでした。あたりまえのことですけど。ほかにも『えびすや』というスーパーを見ました。とても大きかったけど、駐車場がせまくて、つぶれたそうです。それから、昔やっていた映画館も見ました。交番の後の方では、あげな会館を見ました。だいぶ前につぶれたそうですが、今もちゃんと残っていました。あんなに都会だったあげなが、今では、とてもさびしくなっているのを初めて知りました。早く、あげなというまちを、那覇のようなまちに復活させてほしいです。昔よりも、もっと大都会になったらいいなと思いました。もしこんなふうになったら、お店などをみんなしんやで出してみたいです。」(清哉)

活況のあった「昔」の市場の話聞き、衰退した市場を見学した子どもたちは、市場衰退の原因と再復興について素朴な意見を出してくる。正英は、市場衰退の原因のひとつは、駐車場の未整備であることに気づき、市場衰退の原因を的確のぞみにとらえているといえる。安慶名市場の近郊に住む希は、市場の現状を目の当たりにしたことが衝撃だったようである。当日の彼女の日記には、市場復興にける願いが記されていた。「題：昔のあげな市場と今の市場 今日、玉さんの案内で、あげな市場に行きました。昔は、とてもにぎやかだったといわれていたけれど、今の市場は、ポカーンとしています。昔は、映画館、結婚式場もあったそうです。今では、そんなにぎやかな市場ではなくなり、お店がつぶれていっています。もう一度、にぎやかになってほしいです。」

5、安慶名市場の将来を考える

安慶名市場のアンケート結果によると、市場の住民は、安慶名市場のよさを、「いろいろな人に会える」「住みやすい、楽しい」と挙げ、住んでいるの悩みは「駐車場がないこと」「客が来ない」ことを挙げている。市場の住人に今後の願いを聞いた子どもたちは、「駐車場が欲しい」「発展して欲しい」「明るくして欲しい」「商売が繁盛して欲しい(客が来て欲しい)」の要望をまとめている。以上のアンケート結果をクラス全員に提示し、「このままだと、10年後には、市場はどうなっていると思いますか」の問いかけに、子どもたちは、次のような市場像を出してきた。①人がいなくなり、もっと暗くなる。人が近寄らなくなり、危険な場所になる。ホームレスや中学生の溜まり場になる。②市場がつぶれてスーパー等が建つのではないか。③何もなくなっただけの原っぱになる。④市場がつぶれて大きい道路ができる、というものであった。

他方、子どもの中には、何らかの形で市場を復興させたいと願う気持ちもすでに発現している。先に紹介した市場見学後の子どもの記録には、駐車場の整備や公園の設置を願い、市場の復興は市場の人たちや私たちの問題であるとして、主体的に市場問題と向き合う子どもも現れている。そこで、「安慶名市場のために、自分たちでできることは何だろうか?」の問いかけに、子どもたちは実にさまざまなアイデアを出してくれた。それらは、子どもの力(クラス)単位でできるものから、市場の住人の力を得て活動するもの、また、市役所へのアイデア提供の三つに分類できる。以下、子どもの意見を分類し簡条書きに記したい。

<自分たちでできること>

①お店のチラシ(ビラ)を書いて、安慶名の人たちに配る。②市場の掃除をする。ちりひろい。床などの掃除。学校帰り、市場に捨てられているゴミを拾う。市場にゴミを捨てている人を見かけたら、注意する。③安慶名市場でおばあちゃんたちを呼んで、レクをして楽しませる。④掃除をしてみんなが来るようにチラシを作ったり、ポスターを貼ったりする。

「安慶名市場に来て下さい」というポスターを作る。
⑤家で使わないものを売る。自分たちの家でいらなくなった、靴下とか、おもちゃとかを、空いているお店でフリーマーケットをする。つぶれた店でフリーマーケット。⑥お店の手伝い。おばあちゃん、おじいちゃんたちの手伝い。⑦手作り看板作り。立て札を立てる。⑧僕たちがアルバイトする。⑨壁にペンキを塗る。⑩こわれた屋根を直す。⑪電気をつける。⑫市役所に改造してと頼む。⑬新聞社へチラシを作って送る。⑭子ども文化祭*やPTA文化祭を市場でやる。そうすると、人も来るし、空いている店も使える。⑮呼びかけをする（道を通る人に）。⑯自分たちで手作りのおかしを作ったり、いらぬ服や着れない服などをもってきてリサイクルする。⑰市場の品物を自分たちで売りにいく。

※平成11年11月18日（木）、あげな小学校児童会主催による初の子ども文化祭が開催された。子どもの作品展示会やゲームコーナー、お化け屋敷、クレープハウス、トンネルハウス等、多彩な出店で1年生から6年生のみならず多くの父母の参観を得て、大好評であった。

<市場の協力を得てできること>

①市場を音楽を流して楽しくしたい。スピーカーではやりの音楽をかける。②電球等をつけて、明るくしたい。③チラシを配って、「あげな市場まつり」を開く。④屋根の色とかを変える。⑤市場の人たちで市場を掃除したほうがお客さんがたくさん来る。⑥ただ座って客を待つんじゃなくて、自分から歩いてお客を呼ぶ。⑦品物をスーパーの品物とかにする。⑧改造して、と頼む。⑨アルバイトを募集する。⑩壁にペンキを塗る。⑪屋根を直す。⑫他の閉まっている店を女子高校生に人気のある服屋を作る。子どものお菓子屋さんも。大人のコーヒー屋を作る。⑬市場をみんなで明るくして、新しいスーパーやいろんな店を作る。

<市役所をお願いしたいこと>

①安慶名市場のことを市内にスピーカーで放送して

ほしい。②安慶名市場の今の表情をポスターに描いて、あと1枚は、こんなふうになってほしい安慶名市場を描く。③シャッターが閉まっているお店だけを全部こわして駐車場を作れば、ヤンバルとか那覇とかからも人がたくさんくると思う。④市場をまた、建て直す。⑤市場の屋根を直して欲しい。⑥電球の取り替え。⑦新しく明るくて目立つようなお店を作る。⑧テレビでのCM。⑨新しい映画館を作る。⑩やっていない店は、駐車場。⑪めずらしい店を作る。おかし店をつくったりする。⑫ベニヤ通りの映画館だったところに、今のセブンプレックスのような映画館を作る。⑬安慶名会館だった所には、大きいお店を作る。年に1回、まちでパーティをして欲しい。

6、子どもが参画する“まちづくり”とは何か

— 安慶名市場の活性化を考える —

子どもの発案した素朴な安慶名市場の「元気の出るアイデア」を全て書き出し、これをひとつひとつ読み合わせしながら、「学級全員でやってみたいこと」と「市役所をお願いしたいこと」に分け、再度、個々の子どもたちに書いてもらった。それを集計すると、まず、「学級全員でやってみたいこと」としては、①リサイクルショップやフリーマーケットを開くこと、②夢のある市場の将来図の作成と市役所への提案、③市場の模様替えとなっている。「市役所をお願いしたいこと」は、①映画館や大型店舗の誘致による集客能力を高めること、②市場の模様替え、③市場の中でのイベントの開催となっている（次頁表参照）。いずれもユニークなものばかりである。また、市場の実地見学から、暗くて寂しいイメージを払拭するために、市場内での音楽の放送や看板作り、模様替えを要望する意見が多数見られた。

以上の子どもの要望・アイデアをもとにしながら、①少数数のグループ（あるいは個人）で計画・実行できるものは何か、②学級全体で取り組めるものは何かについて話し合った。その結果、学級全体での取り組みとしては、あげな子ども市場（リサイクルショップ）の開催と将来の安慶名像の作成と市長への提案となった。グループ単位での活動のあらましについては、次節で述べる。

学級全員でやってみたいこと（回答数が多いものから）

- ①空いている店を使って、家で使わないものをリサイクルしたり、フリーマーケットをする。
- ②今の市場と未来の市場を描いたポスターを描く。これを役所の人に見せる。
- ③壁にペンキを塗ったり、屋根の色を変える。
- ④市場のチラシを作り、配る。
- ⑤市場の中のゴミを拾ったり、アルバイト（手伝い）をする。
- ⑥自分たちでお菓子を作ったり、洋服を作って売る。
- ⑦市場の中で子ども文化祭やPTA文化祭、安慶名市場祭りを開く。
- ⑧市場で今はやっている曲を流す。
- ⑨手作りの看板を作る。

市役所をお願いしたいこと（回答数が多いものから）

- | | |
|------------------------|---------------|
| ①映画館や大きなお店を作る | ⑥客を呼ぶ工夫をする。 |
| ②屋根等の壊れた所を直す。 | ⑦駐車場を作る。 |
| ③市場の中でパーティをする。 | ⑧市場の中で曲を流す。 |
| ④テレビで放送したり、スピーカーで放送する。 | ⑨フリーマーケットをする。 |
| ⑤市場の中は暗いので、電気（照明）をつける。 | |

7. 安慶名市場内でのボランティア活動

グループの取り組みは、①市場内の呉服店で、店の清掃や商品並べ、お客の勧誘、②花屋の手伝い、③惣菜店での手伝いや清掃、お客の勧誘、④手芸店での清掃、接客、ポスター作りと貼り、⑤饅節店で清掃やお客の勧誘、⑥市場内のゴミ拾いとゴミ調べ、⑦市場内と大通りの清掃、ゴミ調べ、⑧ポイ捨て禁止のポスター作りであった。このうち、①～⑤までの子どものボランティアに協力して頂いた商店は、全て安慶名市場内にある。商店におけるボランティア活動については、子どもたちが直接商店と交渉し、活動の期日を決定した。あらかじめ私の方から、のべ7日間の活動期日を盛り込んだ、「商店街における子どものボランティア活動への協力願い」の書面を持参しての子どもによる交渉である。

活動事例①（惣菜店におけるボランティア）

活動の前日、惣菜店からのサインをもらった夏美は、次のような感想を日記に記している。「今日、5時間目にボランティアでお店のお手伝いをするようになりました。それで、私と千代美さんとお店をさがしにいきました。私たちが、まず『きらら』

に行ってたのだから、すぐOKをもらいました。それから、紙に（○）をつけてもらって、電話番号とかを書いてもらいました。すぐOKしてもらえてとってもうれしかったです。明日から頑張りたいと思います」。惣菜店きらは、二店舗あり、市場内（1号店）と大通り（2号店）にそれぞれある。夏美は、千代美とグループ組み、1号店で惣菜を調理したり、それを販売する2号店で店の主人と共に販売する。2号店は、大通りに面していることもあって、客足もなかなかあり、彼女らは結構忙しく立ち回っていた。ボランティア活動を終えた2人は、店の手伝いが、安慶名の市場づくりに少しでも役に立ったのではないかということと、惣菜店の実状を体感している。

「私は、夏美さんと、1週間ほど、『きらら』のお手伝いをしました。仕事は、皿洗い、野菜いため作り、天ぷらあげ、食べ物運び、おむすび入れ、米炊きなどでした。おばさんは、いつもいつも、『なっちゃんちいちゃん来るから助かるよ』とか、『いつも、本当にありがとうねえ』とか、毎日、言ってくれました。一番うれしかったのは、おばさんが、『二人が来るから、お客が増えたとし、いつもは、忙

しかったけど、二人が来て楽だよ』と言われたことでした。それと、『みんなが来てから、あげな市場が美しくなったし、みんな喜んでいたよ』と言われて、私たちのしていることが本当にまちづくりに役にたっているのだなあと思いました。」(千代美)。「お客さんはいっぱいのおきもあったり、少ないおきもありました。お客さんが多いときは、おばさんも私たちもとっても大変でした。私たちは、店をやることは、こんなに大変なのかがわかりました。天ぷらをたくさん買う人がいたため、天ぷらがなくなったりして、大変いそがしかったです。『きらら』には、いろんな人が来てくれました。高校生やおばさんがいっぱい物を買いに来たり、食べに来たりしてくれました。午後の3時半くらいから4時ぐらいまでがたくさんのお客が来てとっても疲れたけど、物がどんどん売れていってとってもうれしかったです。」(夏美)。

活動事例②(花屋におけるボランティア)

市場に隣接する花屋「レジナ」は、市内でも老舗の店である。女子3名が6日間、ボランティア活動に参加し、初日から、花屋の研修生並の活動をしてきた。しかも、店主から、毎日、子どもの活動の様子が書かれたメモが担任まで届けられた。

2/24(木) 池宮城さん、具志堅さん、仲本さん、よく、お手伝いができました。お花をいける体験も上手にできました。ごくろうさまでした。

2/25(金) 今日、リボンづくり(花束を結ぶ)をお手伝いしていただきました。二十三束です。花用器も洗って下さいました。三十個です。寒いのに水にザンブリとつかってもらいました。ありがとうございました。

2/28(月) 今日、具志川記念病院まで配達にいきました。ラッピングペーパーを三十米の三巻き、正方形に四十枚、切ってみました。よくできました。ありがとうございました。

2/29(火) 今日、高校の卒業式の準備で花束づくりをしていただきました。たくさん、たくさん、つくりました。おかげさまで、ずいぶん、注文がさば

けました。ありがとうございました。

3/2(木) 雨が降っているのに、よくきて下さいました。今日はちょっぴりひまでした。ありがとうございました。

3/4(土) 二日間、卓上花をいけて下さいました。ちゃんと商品として出来上がりました。ありがとうございました。地域とのコミュニケーションができたと思っています。素直なよい五年生でした。いくらからでも皆さんの学習にいかされるとよいですね。ありがとうございました。

ボランティアを終えた仲本と具志堅は、花屋で働く人の工夫や苦勞、難しさを感じながらも人々の支えにより仕事を続けることができることの意味を見出し、池宮城は、花作りの技法を学べたことを感謝している。同時に、3人は、「いつも明るく笑顔で対応」することが接客の基本であることを述べ、これが、まちづくりのポイントだとしている。

「私たちのグループは、花屋さんに行くことになりました。初日は、何もできなくて、おじやまになっているような気もしました。二日目は、ドキドキしながらも行ってきました。そしたら、新しい仕事をさせてくれました。それは、くきを輪ゴムでとめて新聞紙で巻くことです。三人で手分けしながらやりました。それと花のいけ方も教えてもらいました。三日目は、外にある鉢を洗う仕事をしました。カビなどをタワシでこすって落としたりしました。そのときに思ったことは、『花屋さんは花を包んだりするだけじゃなく、水も使うんだなあ』ということです。その日は、少し寒かったです。お店の人が、『ありがとう、本当に助かったよ、本当にありがとう』とお礼を言われたときは、とってもうれしかったです。それにやっついてよかったと思いました。花を包む仕事もどんどんなれてきて、リボン作りも簡単になりました。お客も少しずつふえてきました。花屋さんにもいろいろ工夫・苦勞があることを知りました。」(具志堅)。「私が手伝いをして学んだことは、外から見ての花屋と実際に働いてからの花屋とは、とてもちがうということです。私は、最初、花屋さんだからあんまりつらくはないだろうなと思っ

ていましたが、手伝ってみると、とてもつらい仕事でした。寒いのに水をさわったり、いけ花の時は、花は少ないけど多くみせるために葉っぱを加えたりしていました。本当の花屋さんってこんなに難しいんだなと思い、お父さん、お母さんはこんな思いをしながら、仕事をしているんだなと学びました。ボランティアで役にたったことは、客が増えてとてもはんじょうしたことで、仕事も早く片づいたことでした。私が今までがんばれたのは、お客さんの『がんばってね』の一言でした。この一言ではげまされるなんてとても感動しました。おばさん（花屋の人）たちも、こういう一言でがんばってきたんだなあ実感しました。最後の日、私たちは、この一週間の気持ちをこめてお手伝いをしました。喜んでいただいたので、これもボランティアのひとつだと思います。」（仲本）。「花をいける時には、丸くえがいた感じにいけるそうです。どこから見ても同じように見るととてもきれいです。花束を包むペーパーは、四角形に切って包みました。おばさんは簡単そうにやっていたので、私もやってみました。そしたら、時間はかかったけれど、なんとかできました。でも、おばさんのものと私のものを比べてみると、おばさんの方は、とてもきれいにできていました。宅急便の時は、花と領収書をもって配達して、また、いつも笑顔で渡すことに気づきました。」（池宮城）。

活動事例③（市場内のゴミ拾い運動）

たかひろ まさとし たくみ きよあき
貴寛、真俊、巧、清章の4人は、市場内のゴミ拾い運動を進めてきたグループである。4人は、市場内を中心として、燃えるゴミと燃えないゴミを分別しながら収集し、ゴミの種類についても調べている。市場内から大通りまで活動範囲を広げた彼らは、空き缶の多さに驚き、意外にも吸い殻が多いことに気づいてくる。また、ゴミ捨て禁止のポスター作りに励んでいる他のグループの協力により、市場にゴミがこれ以上落ちないことを願っている。「大通りのところのゴミ拾いをやったときは、びっくりするほどたくさん落ちていました。袋がいっぱいになったから、もうゴミはほとんどないと思い、後ろをふりむくと、まだたくさん落ちていました。でも、かな

りきれいになっていて、いい気分でした。ボランティアの途中で市場の中の店の手伝いをしたので、ゴミ拾いにいけない時もありました。もうちょっとゴミ拾いをすると、もっときれいになっていたのかもしれない。でも、そうじしたけど、まだまだあまりきれいになっていないから、ひまがあつたら少し拾おうと思います。ポスターを作ったグローブものすごくきれいにかいていたから、市場には、ゴミは落ちないと思います。」（真俊）。

8、新潟県安塚町のまちづくりから何を学ぶか

安慶名市場への取り組みを進めている中、社会科学の学習では、過疎に悩む新潟県安塚町と過密のまち、東京都町田市を比較しながらの学習に入っていた。安塚町は、急激な人口減と高齢化が進むまちであり、まちが抱える問題としては、屋根の雪下ろしが大変であること、農家の数が減り収穫量も減ってきていること等がある。そこで、安塚町は、雪国ならではの特色を生かして住民参加のまちづくりの工夫をしているのである。例えば、スキー場開発による観光客の誘客であったり、花いっぱい運動を展開することで心がなごむ美しいまちづくりを目指している。特に、子どもの興味を誘ったのは、雪を商品化したという点である。雪だるま型の発砲スチロールに雪と特産品をつめて全国各地へ夢を届ける「雪の宅配便」のことである（『社会5下』教育出版、P40～47）。

安塚町のまちづくりから、子どもたちは、何を学んだのであろうか。安慶名の活性化の問題を安塚町のまちづくりとリンクさせて考えることができたのであろうか。亜矢子は、「あげな市場は、いつも客をよぼうとはあまりしなかったけど、安塚町は、自分たちから積極的にまちづくりをしていった。だから、それをマネしてあげな市場で商売する人たちも積極的に活動していけばいいと思います。例えば、花いっぱい運動があつたので、市場もそういう風にしていって、そのアイデアに少し何かをたしてあげれば、どんどんよくなっていくと思います。私たちのあげなのまちづくりも、安塚町のように活気のあるまちづくりをしていきたいと思います」と結んでいる。美佐子は、安塚町がまちづくりに励んでいる姿

から、安慶名市場おこしを頑張らないといけないと思うようになって。「私は、安塚町のまちづくりから学んだことは、いっしょうけんめいまちづくりにはげんでいるので、私たちもあげな市場おこしをがんばらなければいけないなと思いました。市場全体を公園にするとか、あるいは、市場の中に公園を作るとか、いろいろ考えはあると思います。あと、市場の空いている店を利用するとかもできると思います」。

子どもが安塚町のまちづくりから学んだことは、まちづくりの成功の鍵を握るのは、人々のアイデア次第であるということであり、熱意がないとまちづくりは成功しないということである。子どもたちは、安塚町の花いっぱい運動に共感し、また、人（客）を呼ぶための試みとして、閉店した店を活用してのフリーマーケットをあらためて提案する。また、巫矢子の花いっぱい運動の提唱は、学級全体の共感を呼び、^{こずえ}梢は、これを受けて「自分たちだけで花いっぱい運動をするのではなく、あげなの市場の人たちやあげなの人や市役所の人たちもいっしょになって、花運動をやって、みんなで運動」を展開することの大切さを説いている。子どもの主張は、まちの活性化のためには、地域の人々と協力してまちおこし運動を展開する点にあり、人々が意見を出し合いながら試みることの大切さを説いている。

9、富里朝健さんが語る「将来のあげな」

富里朝健さんは、具志川市役所を長年にわたり勤め、主に、教育委員会や都市計画に携わってきた。退職後も、具志川市のまちづくり運動に関わり、積極的に行動している。今回、民間の立場から、衰退しつつある安慶名区（市場も含む）の活性化の方向性を学ぶ目的で、学級で講話会を計画した。以下、富里さんのまちづくりについての話（一部）と、子どもの要望を収録した。

- 期 日 2000年2月10日（木）第3校時
- 場 所 本校5年1組の教室
- 話 者 富里朝健（具志川市物産振興会長）
- 聞き手 5年1組の児童及び担任

私は長い間、役所の方に勤めておったのだが、定年退職した後も、安慶名の再開発事業の所にも関わりをもっているのをごさいます。安慶名の再開発について、みんなで知恵を出し合って、立派なまちづくりをしようと頑張っているところでございます。特に、みなさんが、安慶名の周辺ですか、空き店舗の調査等いろいろ試みているようですが、安慶名のまちづくりについて関心をもって勉強していることに大変嬉しく思っています。というのは、役所と安慶名の区民が一緒になってつくっております安慶名再開発推進委員会というのがございまして、毎月、勉強会をしております。また、具志川市の商工会では、ひとづくりのためには、立派なまちづくりが大切だという考えで、安慶名のまちづくりについて取り組んでいます。子どもから大人までまちづくりに関心を持っていること、将来の明るいまちづくりということで、動いておられることに対して、地域に住む者として大変感謝しております。

さて、再開発事業というものはどういうものかといいますと、まず、ここに、みどり町の地図がありますね。以前ここは、もちろん、みなさんが生まれる前だと思えますが、軍用地なんですよ。軍用地というのは、アメリカ軍の施設等があったところです。通信施設といって、鉄塔があったんですが、そこが開放になり、その跡地をどうするかということが問題になりました。みんなが知恵をしぼりまして、こういう立派な区画整理事業が進んで、みどり町になったんです。これが区画整理事業のモデルのひとつなんです。じゃ、安慶名はどうか。いま密集している道路や建物を、区画していくためには、どうするかなんですが、並大抵のことではないのですね。

（安慶名の地図を指して）これが安慶名公民館ですね。ここがあげな小学校ですね。このひとつひとつの四角は、家をあらわしているのですね。いまの推進事業は、ここの（安慶名区を指して）区画整理を進めるというものです。ここの面積は、30万坪ありまして、みどり町よりも広いのですね。また、建物がたくさんありますよね。区画整理するとなると、いま建っている家をつぶさないといけなくなるので

すよ。道を新しくつくるためには、家をつぶさないといけないうし、また、道ばかりではなくて、公園を作るときにもやはり、誰かの家を壊さないといけなくなるのです。具志川市が村から市に昇格するとき、市内のあちこちに、児童公園は、ここにつくるとか考えました。前もって考えておかないと、後から公園を作るとき、大変難しいですよ。それで、あらかじめ、児童公園を指定しておくわけなんです。こうしないと立派な計画的なまちづくりができないわけですよ。土地をもっている人、地主といいますが、あらかじめ、地主の考えをそばにおいて計画を立てるのですよ。ひとつの土地に児童公園は、いくつ作りなさいとかの国の基準がありますので、みどり町には、たくさん公園ができました。土地というものは、先祖代々から受け継がれてきたものだし、大切なものですが、公のためには、個人の土地であっても、全体のためには、地主の考えは、通らないこともあるのです。みんなが使うものが優先になるのです。誰かさんの家が犠牲にならないと、道は作れないのですよ。こっちの人が協力したからこそ、道ができるのですよ。

さて、安慶名の再開発はどうするかなんですが。安慶名の道は、きちんと計画されて道が出来たんじゃなくて、戦争が終った後に自然にできたものだったんです。ここの道は、救急車が入ったり、消防車が入ったりすることが出来ない細い道ですよ。だから、こうした車が入れるような道がどうしても必要なんです。国の基準にそって、大きな道路を作ることが必要なんです。また、自分たちの家の前が、道路に接するようにした方が便利だし、大切です。

区画整理事業に関する難解な説明もあったが、安慶名の再開発について熱心に考えている富里さんの話に集中した30分であった。講話後、子どものまちづくりに関する要望を聞いた。子どもたちは、①郊外型大型店舗の誘致、②安慶名市場の拡大・充実(公園・広場の設置、おもちゃセンター、映画館、本屋、電球設置・屋根や壁の修復、音楽を流して欲しい、駐車場整備)、③モノレールの導入、④ボーリング場の設置、⑤空き店舗の活用、⑥遊園地を作っ

て欲しい等の要望を相次いで発表した。子どもの要望は、現実の市場の活性化のための方策を提言するものから、夢のある安慶名を描いたものまで多岐にわたるものであった。子どもの要望に耳を傾け、メモを取っていた富里さんは、次のように答えてくれた。

<富里朝健さん>

みなさんが、市場を含め、安慶名のことについて真剣に考えて下さっていることに感謝しております。特に、駐車場の問題と空き店舗の活用は、大切だと考えております。空き店舗の活用については、商工会が進めているところです。また、魅力ある事業のおこしもいうのでしょうか、それも考えなければなりませんね。市場のペンキの塗り替え、電球の取り換え、働く人を確保するというのも大切ですね。また、まちづくりにとって、いい店がどうかというのも考えなければなりませんよ。そこで、どうでしょうか。将来の安慶名と市場を描いた図面をみなさんの方で考えて、役所まで持ってきてはどうでしょうか。きっと面白いものが出来ると思いますよ。

富里さんの講話後、市場おこしのための現実的な打開策を再度子どもなりに考えてもらうため、「安慶名市場を元気にさせるための願いは何ですか」と問い、また、「将来の安慶名に作って欲しいものや願いは何ですか」を質問した。子どもの要望は、①空き店舗を活用したフリーマーケットの開催、②花一杯運動、③市場の壁塗りや屋根の直し、④音楽の放送、⑤祭りの開催、⑥子ども預かり場の設置、⑦福引、⑧魅力あるお店を作る(お菓子屋、おもちゃコーナー、伝統工芸品店、本屋)、⑨駐車場の設置、⑩児童公園の設置が挙げられた。子どものアイデアは、ユニークなものばかりである。講話の中で十分発言ができなかった子どもも、将来の安慶名像について次のような要望をもっている。「将来あげな^{のぞみ}に作ってほしいものは、モノレール、みんなが楽しめる遊園地などをたくさん作り、ボウリング場などいろいろなものを作って、いまのあげなよりもっとみんなが楽しめるものを作ってにぎやかにしてほしいです」(希)。「僕は、将来のあげな^{のぞみ}に作ってほ

しいものは、シャッターが閉まっている店を子どもや大人に人気のある店にしてほしいということ、駐車場も作ってほしい、公園も作ってほしい。人が来るような何かを作ってほしい」(啓香)。「私は、あげな市場を元気にさせるために、空いている店にフリーマーケットとかを作り、安塚町から学んだ花運動や壁塗り、屋根直し等、いろいろなことを実行したいなあと思っています。そして、あげなを広くして、遊び場を作って、赤ちゃんがいるお母さんたちの預かり場を作りたいです。」(梢)。「音楽を流したり、あげな市場で祭りを開いて、あげな市場特製の料理とか、あげな市場オリジナルTシャツとかを作って、祭りを開きながら売るのはどうですか。」(しおり)。「僕たち5年1組は、富里さんの話を聞いてお願いをしました。例えば、市場の中に公園みたいなものを作って欲しいとか、シャッターが閉まっているお店を利用しておもちゃコーナーやいろいろ人気のあるお店や専門店、駐車場を作って欲しいといういろいろ頼みました。富里さんは、おもに、シャッターの閉まっているお店を利用することや駐車場を作ることに力を入れると言っていました。」(好太郎)。

子どもたちの関心は、衰退しつつある市場の活性化をどうするかという点と、安慶名再開発への展望を願うものである。前者の子どもたちの願いは、後述する「安慶名子ども市場」の開催に結実し、後者については、富里さんの提案した「将来の安慶名像」のデザイン画の制作に結びつくことになる。

10、安慶名市場の将来像の制作

子どもの描く将来の安慶名像は、夢と希望にあふれた創造的なものである。子どもたちは、将来の安慶名のまちづくりに必要なものとして、デパート、大きい道路、モノレール、公園、ボーリング場、スイミングスクール、おもちゃの専門店、レストラン、歩道橋、神社、本屋、図書館、結婚式場、老人ホーム、動物園、水族館等を挙げた。「夢と希望のまちあげな」を創るために出されたこれらを、子ども一人一人が、自由な発想でデザインし、合作していくことになる。同時に、まちづくりの骨格となる道路は、全員の話し合いで縦横の幹線が出来上がる。

まさに子どもの手による区画整理事業である。完成間近の「夢と希望のまちあげな」を前にして、子どもたちの中には満足する子もいれば、まだ不十分だと指摘する子もいる。「未来の地図は、緑があるし、外灯もあって明るいまちだけど、今のあげな市場は、つぶれた店はそのままで、とても暗いまちだとあらためて感じました。私たちが考えたあげなは、いつできるかわからないけど、昔のように活気があるまちにもどってほしいです。」(奈々)。「最初、家などをかいてはった時は、とても都会のようでした。だから、みんなで木や草(緑)をたくさんかきました。もちろん、市長にみせるものなので、とてもきれいにかきました。ぼくは、このみらいのあげなの地図に自信があります。ぼくたちが一生けんめい作ったまちだから、ぜひ、市長にみてもらって、みらいは、僕たちがかいたまちになってほしいです。」(好太郎)。「今のあげなは、ぜんぜん人がいないゴーストタウンみたいです。でも、ぼくたちがかいた将来のあげなは、ひと目で、にぎやかなまちとわかります。あげなタワーから、あげなボール、あげな映画館と、いろんな施設があります。はやく、あげなをふっ活させてほしいと思いました。」(清哉)。「今のあげなは、他のまちに比べると大きな目立つお店も特になく、市場周辺も暗い。だけど、今、私たちの取り組んでいるまちづくりで、みらいのあげなを作ってみた。今まで勉強して物足りないところ、直してほしいこと、全部が全部じゃないかもしれないけど、今のあげなと比べると、こっちのあげなの方が緑もあるし、新しくタワー、大きい店、いろんなものがある、とても明るくなっている。だけど、このままでは、ポイ捨てがあるのではと思います。それは、ゴミ箱があまりないからです。完成までに、本当によいまちづくりにしたいです。」(亜矢子)。「今のあげなと比べて、みらいの地図は、外灯などもたくさんあって、レストラン、公園などがたくさんあります。ただ、もう少し、緑が欲しいです。一生けんめいかいているけど、緑が多く感じません。だけど、今のあげなとちがって、みらいのあげなは、今よりもっと明るくなると思います。なんだか、みらいのあげながどうなるか楽しみです。」(希)。

「5の1の28人のちえを使ってやったので、きれいなまちができたと思います。でも、なんか物足りないと思います。それは、かんじんのちり箱、ゴミを捨てないでの看板みたいなものがないからです。ちり箱がないと、ポイ捨てをしてしまいそうです。それと、みんなで最後まできちんとちえを使ったので、すてきなあげなになると思います。だから、みんな一人一人が協力すればきれいなまちが必ず訪れるということを私は信じています。」(しおり)。

学級全員で取り組んだ未来の地図づくりに子どもの多くが基本的には満足しているものの、亜矢子やしおりの指摘するゴミ箱と看板が設置されていないこと、希^{のぞみ}の自然(緑)の少なさの指摘は、他の子どもを説得するものであった。そこで、再度、彼女らの意見をふまえて、「未来像」に加筆した。2月末には完成、3月中旬には、具志川市長へ提案となった。完成した未来図の特徴は、①救急車両も十分通行できる道路と区画整理された土地、②緑化された区域が広がり、広場や憩いの場、遊園地がある、③現在の安慶名市場の悩みである駐車場が確保されている、④市のシンボル、あげなタワーが中心部に建っている、⑤住宅街と商店街が分かれている、⑥ゴミ箱が設置されている、⑦東西南北に交番がある、⑧外灯が設置されている等である。

さて、将来の安慶名像である「夢と希望のまちあげな」を市長へ手渡した亜矢子は作文は、これまでの「まちづくり」学習の過程をまとめたものとなっている。全文掲載したい。

夢と希望のまち あげな

私たち5年1組は、3学期を少し過ぎた頃から、住みよいまちづくりや、あげなの市場について考えてきました。最初は少し不安だったけれど、だんだん、やってみようという気持ちになってきました。

一番初めにやったことは、あげなと西原は、住みやすいか、住みにくいのかということを考えてことでした。次に実際に住んでいる人がどう思っているのか調べていきました。すると、西原は、静かであり、緑が多いなどがありました。一方では、お店が遠い、公園の管理をきちんとしてほしいなどがあ

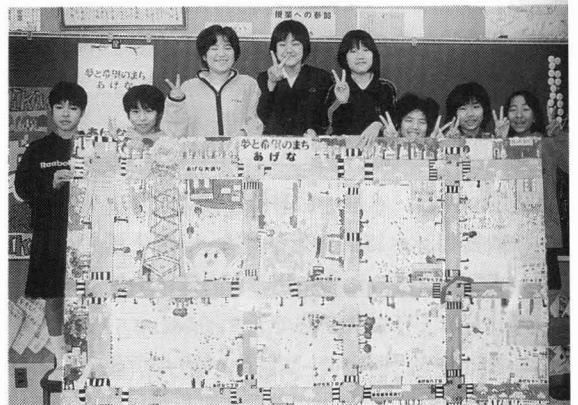
りました。また、あげなに住んでいる玉里幸子さんと市役所で働いていた富里朝健さんに話を聞きました。玉里さんは、昔のあげな市場について話して下さいました。30年前のあげな市場は、とても活気があって、お客さんがあまりお金をもっていないときでもサービスしてくれたそうです。でも、今では暗く、さびしいです。富里さんは、将来のあげなのことについて話してくれました。私たちは、遊園地などを作ってくれるようにいろんな意見をだしました。

そして、いよいよあげな市場にいてボランティア活動をしました。ゴミ拾いや店の手伝いをしました。いろんなことが体験できたとし、お店の人の苦勞なども学びました。

次に、未来のあげなの地図である「夢と希望のまちあげな」を作りました。あげなタワー、図書館、草花、ブックボックスなど、いろんなものをかきました。全部できるかどうかはわからないけれど、このようなまちに近づけるといいなと思いながら、完成に近づけていきました。

最後に、あげな市場で「子ども市場」を開くことになりました。その日は、3月18日の土曜日です。このことを機会にして市場のことをみんなに知ってもらい、市場がまた活気を取りもどせることができたらしいと思います。

私たちはよいまちづくりの学習をして、いろんなことを学びました。そして、まちの人たち一人一人も、市場のことやまちづくりのことについて関心をもって、本当のよいまちにしてほしいです。



子どもからの提案を受けた市長は、「私も胸がどきどきするくらい具志川の街づくりに希望を持っています。実現に向けて取り組んでいきます」、「これからは具志川市を大事に、安慶名を大切にしながらみんなで考えていい街にしていましょう」と答えてくれた。

11、あげな子ども市場の開催

まちづくりの学習の最終段階は、安慶名市場内での「あげな子ども市場」の開催である。リサイクルショップ等を開催し、にぎやかな市場を再現したいとする子どもの願いに圧される形で「あげな子ども市場」を開催することになった。玉里さんから聞いた30年前の安慶名市場を再現したいとする子どもの願いである。子どもたちは、7つのグループに分かれ、家庭から持ち込んだリサイクル用品、おもちゃ、洋服等々が準備された。また、ショップを開くためには資金が必要だという要望があり、学級費の中から1人300円の補助をした。5人編成のグループであれば、1500円の資金となる。例えば資金の使途として、農家から安く野菜を購入しそれを子ども市場で販売することも考えられる。近郊のスーパーから安く仕入れたお菓子や飲み物、手作りのクッキー、沖縄伝統の手作りのムーチャー等、子どもの市場の準備は進んでいく。市場の準備を進めている子どもの日記から、その状況が伝わる。「3/13 私は、今日、5校時が終わって、市場の準備に取り組んでいきました。私たちのグループは、しおりさんのおばあちゃんの畑の野菜を買うことにしました。だけど、しおりさんのおばあちゃんがいなかったの、クッキーの材料を買いにオキマートに行くことにしました。」(希)。「3/13 今日、学校が終わってから、ユニオンとカネヒデとオキマートに行き、一番安い飲み物をさがしに行きました。そしたら、ユニオンが1缶37円、カネヒデでは40円、オキマートでは40円から50円だったので、一番安いユニオンで買いました。そしてジュースを16缶買いました。同じグループの好太郎君たちは、赤道のサンエーまで行ってお菓子と飲み物を買ってきてくれました。なんとあんな速くまで歩いてです。」(啓香)。EMプラザ(EM食

材の販売促進店)に母親が勤める松吾は、EM野菜(トマト、インゲン、キュウリ、ジャガイモ、ネギ、葉野菜等)を50束注文し、子ども市場の準備を進める。松吾の母は、EM研究機構をとおしてビデオ撮りの計画を立て、EMインフォメーションとして放映する旨を申し出てきた⁽⁸⁾。

個人的に市場の販売構想を練っている子も現れた。惣菜屋でボランティアをした千代美である。彼女は日記の中で、市場で販売するものとして、①お菓子、②飲み物、③洋服、④カード、⑤おもちゃ、⑥絵本を考えている。特に人気商品であるお菓子は、子どもが食べやすいように小さいチロルチョコレートや、歯が弱い人のためにやわらかい物、くずして食べられるものを条件としている。彼女のグループは、資金不足のため、近郊のサンエー店で100円ゲームを駆使して、30~40円のお菓子を予想以上に獲得、市場で販売する計画を立てている。子ども市場開催一週間前の学級の日々のめあては、「最後のしめくり、あげな子ども市場を成功させよう」と表示され、子どもの情熱が伝わってくる。市場開催の二日前、商品を市場の空き店舗に搬入し終えた子どもたちは、次のような感想を述べている。

「私は、今までまちづくりのことについて勉強してきた、いよいよあさって、子ども市場を開くとすると、とてもきんちょうします。もし売上が(先生から)借りた分より低くなってしまったら、とても大変なことになってしまいます。私たちは、市場のことについて勉強したけれど、やはり今と昔の市場はかなり差があったそうです。でも、私たちは、今回の子ども市場でたくさんの人が来て、これを機会にして、市場にたくさんの方が来るようになってほしいと思います。だから、あさっての子ども市場は、まちづくりによいプラスとなるかなあと思って、開きたいです。」(亜矢子)。「僕はあさっての土曜日にする子ども市場で、大勢の人が来たらいいと思います。そして、昔の市場のようになって、明るくなってほしいです。ゴーストタウンの市場を明るい市場になってほしいと思っています。そして、僕たちも明るく商売をしたいです。パレードも成功したいです。」(剛)。「私は、あさっての子ども市場は、にぎ

やかでおかしなどを食べたり音楽クラブのマーチングで盛り上がり、30年前のような市場をやりたいです。私たちは、活気のあるまちづくり（市場）にしたいと目標を立てているので、にぎやかな楽しい市場にしたいと思います。私たちがいっしょけんめい努力してきたので、子ども市場でその成果が出たら、もつとうれしいです。」（葉月）。「私は、18日のあげな子ども市場で、みんな売り切れるとうれしいなと思います。私は、みんなが来てくれるように努力をします。それに音楽クラブのパレードもがんばりたいと思います。まだ、全然おぼえていなくて、なんだか不安ですが、子ども市場では全部売り切れてほしいです。」（彩花）。「私は、あさっての子ども市場は、自分たちの店の商品が全部売れるといいです。お客さんがいっぱい来てくれて商品をうれしく買ってくれるといいです。あさっての子ども市場はみんなで楽しくやりたいです。みんなでいっしょけんめいがんばるといいです。」（夏美）。

リサイクルショップの開催と共に子どもの願いは、市場を花でいっぱいにするのであった。苗を購入する金銭的な余裕がなく、実現は不可能と思っていたが、具志川市役所の商工観光課から補助金が得られることになり、子どもの花いっぱい運動は実現した。ペゴニア等を農協から購入し、120鉢を30個のプランターに盛り、子ども市場の当日、市場内を装飾した。

3月18日、「あげな子ども市場」の開催である。本校PTA会長が主宰するバンド演奏がオープニングを飾り、30名余の音楽クラブが、市場通りをマーチングした。音楽クラブの演奏の後列に5年生の子

どもたちが行進する。引き続き、午後2時から4時まで、市場のアーケード内で子ども市場の出店となった。子どもの出店の商品は、自宅から持ち寄った衣類や、おもちゃ、農家から安価で仕入れた野菜等である。くじ引きや腕にフェルトペンで絵を描く「ボディペイント」等、アイデア商売も好評であった。子どもたちの出店には、あげな小学校子ども文化祭で見せた、様々な工夫が凝らされていた。子どもの手書きによるピラ数百枚と「安慶名公民館だより」による公報活動により、地域の父母住民、商店街の人々、近郊の小学校の子ども、地元新聞記者等が詰め掛け、子ども市場の一角は、さながら30年前の安慶名市場の活況を思わせる程であった。

子ども市場における7つのグループの売上総額は、35,976円であった。この売上金をどのように活用するのかを学級内で討論した。話し合いの中で、①市場の屋根を直したり、シャッターのペンキ塗りをした方がよい、②花（木）を購入して「あげな子ども市場」の会場になった場所に設置する、以上の二点に絞られた。①については、市場の商店街の協力を得ることが難しいのではないかとということと、この売上金では完全修復は難しいとの結論から、結局、②の花木（観葉植物、ベンジャミナ3本）を市場内のアーケード内に置くことに決定した。また、売上の半分は、子どもたちの教育活動に直接還元できる品物として、自動鉛筆削り機3台と油性マーカー3セットを購入することになった。

12、おわりに

市場開催後の子どもの感想には、市場を自分たち



の力で盛り上げ成功した喜びを綴り、あの30年前の安慶名市場の復活を自らの手で再現したことを素直に受け止めている。一方、本格的な市場活性化のための本質的な問題点を指摘する子どもも現れている。「私は、3月18日の『あげな子ども市場』で、店を開いてわかったことは、昔はこれくらいの人があったんだなあと思いました。それに、玉里さんが言っていたみたいに、何も言わなくても人がたくさん来て、どんどん売れていきました。おかしとか、花とか、おもちゃなどが売れました。でも、だんだん時間がたつにつれて、またもとのさみしい市場にもどってしまいました。片づけをして帰るときには、完全にもとの市場になっていました。私たちが、毎日、お店を開いても、今みたいにさみしくなっているのかも知れませんが、やっぱり、駐車場を作ったり、大きな店を作ったりしないと、昔の市場みたいに、活気のあるにぎやかな市場にならないのかもしれない。」(美佐子)。子どもにとっては、市場開催は貴重な経験となったが、その経験をとおして再度、市場活性化のための現実的な視点を見つめ直した子どもが出てきたことは特筆してもよいだろう。

衰退化した市場を活況のあるものにしたいと願った子どもたちは、「あげな子ども市場」を開催することで、まちの現実的な諸問題を学び、また、将来の安慶名像「夢と希望のまち あげな」の制作は、まちづくりへの関心と意欲を深める機会であった。市場内でのボランティア活動も、市場を活性化したいと願う子どもの発想から考え出されたものであり、その活動体験をとおして、市場での商売の難しさやその職業の楽しさをまさに肌で感じ取っていたことは貴重な経験であった。今回の子どものまちづくりの活動は、安慶名市場通り会の協力や市役所の理解と協力（CGGによる補助）を得たのものであった。また地元の製紙工場からトイレトペーパーが無償提供され、子ども市場を盛り上げるのに一役買ったことも付け加えておきたい。

ところで、まちづくりの学習は、新しい発想と継続が大切である。地域活性化のために地域の子どもがまちづくりに参加することの大切さを指摘する一方で、地域の学校（子ども）がどのような形態で日

常的にまちづくりに参画できるかを検討する必要がある。筆者は、子どもが生活する‘まち’‘地域’の中で、子どもが行政参加する形態を考究すべきであると強調する。例えば、校区内にある計画予定の公園は、まさに子どもにとっての遊びの場であるから、子どもの公園構想をワークショップ等をとおして行政に反映させていくプロセスも面白い。こうした活動は、子どもの行政参加の一步となるだけでなく、子どものまちづくりの認識を育むものである。

【注及び引用・参考文献】

- (1) 「琉球新報」2000年2月8日。
- (2) 「琉球新報」2000年2月13日。
- (3) 市内におけるEM活用の実践事例としては、公立学校水泳プールの塩素による人体への影響緩和や、ごみ焼却場で悪臭やハエ、ゴキブリの発生を抑制する等、EM活用で成功を収めていることが報告されている（「琉球新報」2000年2月3日）。
- (4) 田村明著『まちづくりの実践』岩波新書、1999年、28頁。
- (5) 同上、123頁。
- (6) 『具志川市議会報—第229回（12月）定例会—』第112号、具志川市議会事務局、平成12年3月1日。
- (7) ホームページのアドレスは、
http://www.pref.okayama.jp/doboku/kensido/kodomo/katudou_2.htm
- (8) 琉球朝日放送「沖縄大好きパート5」2000年4月2日、放映。

※本報告は、沖縄教育学会第8回大会（2000年8月26日、琉球大学）における自由研究発表（口頭発表）の原稿に加筆補正したものである。

「琉球新報」 2000年（平成12年）
3月16日（木）朝刊

「沖縄タイムス」2000年（平成12年）3月22日（水）朝刊